

パラオ女性の日常生活とその変化

—パラオの「仕事とライフ・イベント」に適した社会デザインを模索して—

廣瀬 淳一
(高知大学安全・安心機構)

Transformation of Daily Living of Palauan Women:
Exploring Appropriate Social Design for “Work and Life-event” in Palau Today

Junichi Hirose
Division of Safety and Security

Abstract:

This article explores social design suitable for a “work and life-event” from the daily living of women in Palau today. However most of the developed countries including Japan naturalized the social system similar in nature in the paternal society, Palau is still known for the matrilineal society. It is the case that the American lifestyle made a dramatic change in Palauan life style under the American administration. It will be also natural that a tradition is constantly evolving.

But In fact, Investigation has revealed that the matrilineal concept of values still remains deeply rooted in Palauan social design. Some statistics indicate that women's participation in the society is doing in smooth water. But the careful study including a hearing survey showed the reason why Palauan women are active in various field such as a superior education, high-paying jobs, and keeping working while raising children. In Palau, women are in constant pressure from existing demands of traditional and cultural aspects of the Palauan society. Palauan women actively contribute to the clan more-so than men. Because providing assistance for women to pursue higher education and professional development will serve to strengthen the clan. Woman of same kinship group who become successful will empower other women within the clan, thus providing hope and encouragement to the younger generation of women within the same clan. As a result, the spirit of helping one another, sharing information of education and job opportunity can lead to greater involvement and empowerment of women to participate in leadership and governance.

While some young women who are studying abroad question traditional moral values. Some young wants to go to college not only for the clan but also to fulfill individual success. I think some good aspects of traditional culture would have been lost. Actually, many of them have no chance to share traditional knowledge at the school because that is things to be shared by traditionally qualified person in non-literate society. Up until the present, Palauan people come to graft a foreign borrowing on the traditional system. But traditional social design will have limitations to accept different concepts of value in its own. It's high time to share traditional knowledge as written recode and create the best design old and young alike.

Keyword

Palauan women, Matrilineal society, Gender and Development, Work and Life-event, Social Design

はじめに

仕事とライフ・イベントの両立は、核家族や少子高齢の現代日本において取り組むべき喫緊の課題となっており、その解決の方策について高い関心が寄せられている。ライフ・イベントとは、「人生の出来事、人生の道標、意味ある変化をもたらすもの (Homes and Masuda 1974)」¹⁾、あるいは「日常生活のなかで誰もが多少かれ少なかれ体験する状況 (Dohrenwend 1974)」²⁾等とされており、その定義が該当する範囲は広い。ライフ・イベントは仕事との両立の文脈においては、仕事、結婚、出産、育児、介護等を指す場面で使用されるが、心理学の領域ではもう少し広く、夫の転勤、夫婦別居生活、離婚、親族の死別、著しい成功等のストレッサーも対象に含めて使用されることもある。

仕事とライフ・イベントの両立が語られる時、欧州の先進的取組が紹介されることが多い。ライフ・イベントは結婚、出産、育児、離婚など人間としての基本的な生活に直結しており、国や地域の枠を超えて共有できる部分も多いので、他の地域の人も欧州の先進的取組から学べる部分は多い。しかし、ライフ・イベントに係る文化や制度は、自然環境、社会環境、歴史や文化など様々な要素が複合的に関係していることから、ある社会のモデルをそのまま他の社会のモデルとして採用できるかどうかについては、多様な社会の事例について考察し、自文化に適した方法について慎重に検討する必要があるのは言うまでもない。

本稿では、グローバル化が進むなかで「母系社会」(注¹⁾)の仕組を残しながら、その発展の形を模索しているパラオ共和国(以後パラオ)(注²⁾)に注目した。特に母系社会における女性の生活に焦点を当て、パラオにおける「仕事とライフ・イベント」の状況と生活を取り巻く環境と社会の変化について調べ、今日まで受け継がれてきた社会の仕組と未来のそれについて考察する。また、本稿では、地域で作られ共有されてきた社会の仕組について社会デザインという言葉を使用したい。ここでは、社会デザインを「モジュールとしての多様な小システムを、全体として効果的に機能させるためのグランドデザインであり、社会の規範を規定する象徴構造である」と定義することとする(注³⁾)。

1. パラオの社会デザイン

(1) パラオの概要

西太平洋カロリン諸島の西端に位置するパラオは、国連の戦略的信託統治領の地位を脱して、アメリカとの間で自由連合協定(Compact of Free Association)を締結し、1994年にパラオ共和国として独立した。1885年以降パラオはスペイン、ドイツ、日本、アメリカという大国の統治による「圧力」を受けてきた(Luka 2011)³⁾。パラオは独立後も、アメリカが軍事戦略上必要な場合にその領土の使用をアメリカに認めることを条件として、教育、医療、通信、文化など広い領域で経済的技術的支援を受けている(MOF 2006)⁴⁾。パラオの経済は、気候変動の影響を受けやすい、脆弱な自然環境に頼った観光業と外国からの経済援助に依存しており、就労人口の17.7%が公務員や政府関連機関の職員である(注⁴⁾)。パラオ政府は持続可能な発展による経済的自立を目標とし、外国政府や国際機関より財政的、技術的支援を受けているが、経済的自立への目途は立っていない。

(2) 伝統的価値とその変容

パラオにおける社会デザインの中心的な価値観は、母系社会における伝統的慣習である。なかでもパラオの女性にとって最も重要なライフ・イベントのひとつは初産の女性を祝う出産儀礼である(注⁵⁾)。留学経験を持ち、国外で生活する若者の中にも儀式のために一時帰国する者がいる(写真1)。パラオは、歴史の中で価値観の変化を余儀なくされながらも、母系制の特徴を反映させた仕組を維持してきた。初産の儀式は夫側と妻側の母系親族が財貨と労働を交換し、新たな結びつきを産み出す場(安井 2012)⁵⁾として、パラオでは欠かせないイベントである。この儀式は、親族集団の女性たちに仲間と認知されるための儀式でもある(写真2)。パラオでは母系集団に所属している成員が社会において優位な立場にあるとされ、知識や財産の相続も母系を伝って行われてきた(注⁶⁾)。女性は小学生頃から口承伝承で母親や親族の女性から知識を授かり、ウドウドと呼ばれる伝統貨幣でもあるビーズの装飾品を受け継いだ。これらの装飾品には親族集団にとって大切な知識が物語として割り振られており、女性は装飾品を受け継ぐとそれに因んだ物語を少しずつ記憶する(注⁷⁾)。これらの物語には財産にかかわる内容も多く、女性は男性に比べて早い段階で将来に対して具体的な目標を持ち、教育や職業に関心を持つようになると言われる(廣瀬 2010)⁶⁾。

パラオでは、年齢や性別で分けたグループごとに行われた伝統的な教育に加えて、外国人が導入した教育を巧みに組み合わせた教育が行われてきた。1945年頃の学校教育制度にはアメリカ式が採用されたが、学校運営そのものは地域共同体によって主体的に行われていた。ところが、1960年代以降になって、東西冷戦の影響からパラオの地政学上の価値が高まり、パラオの教育政策に対するアメリカの関与が強まった(Palau National Committee on Population and Children 1997)⁷⁾。やがて、アメリカの価値観をパラオに広める目的で、地方の村落にまでアメリカの平和部隊が派遣され、若者の生活や態度を変容させていった(MOE 2006)⁸⁾。地域共同体は教育の主体性を取り返そうとしたが、ケネディー政権が太平洋島嶼地域への経済援助額を大幅に増加させたことで、

自治政府、信託統治政府等の職員ポストが急増し、アメリカ的教育を受けることのメリットが強調された（青柳 1985）⁹⁾。日本統治時代の南洋庁勤務のパラオ人行政官や巡警、助教諭などの役職には男性のチーフや学校の成績の良い男性が就いていたことから、戦後アメリカ統治に代わってからも暫くは男性が働くことが役職に就くことが多かった。しかし、アメリカの学校教育が普及し、女性の教育や職業の機会が拡大すると、女性の活躍の場が広がっていった。

ところが、伝統的な仕組として家庭や地域で伝えられる価値観と学校教育で教えられる価値観には大きな違いがあった。パラオでは「ある知識を知る権利は特定の個人や集団にしかなく」、そして「知識は制限される」（Kesolei 1977）¹⁰⁾と言われるように（注⁸⁾、知識は特定の人々に限定されるという考え方があった。このような知識の独占の習わしは、知識を共有する目的の学校教育のあり方と異なり、教育エリートと伝統的なエリートとの間に対立を生み出した。グローバル化が進み、多様な価値観が押し寄せる時代に、伝統的な様式で継承されている社会の仕組は一部の若者にとって理解が難しくなっている。さらに、アメリカの価値と現在のパラオの生活との関係に配慮して創り上げた社会の仕組、つまり新しい社会デザインが明示されないなかで、若者たちは混乱している。そして、男女の関係についても、平等を謳う学校教育が定着したところで「女性と男性の様々な主張が交差しているという状況」（遠藤 1999）¹¹⁾がパラオ社会の現状である。

しかし、伝統的に語られる「知識の独占」も、必ずしも正確な表現とは言えないということも忘れてはならない。伝統的な考え方においても、何かが一人の決定で決まることは「非パラオ的」なことであり、何事も「話し合い・交渉」のなかで決まるのがパラオ社会である（遠藤 1999）¹²⁾。社会における女性と男性の関係も相補的で、話し合いのなかで何事も決定され、けっして一人の人間が権力を持つわけではない（Smith 1983）¹³⁾。アメリカ的な教育エリートが生まれることで、かつて知識を持つ者に求められていた「位高ければ徳を要する」とする態度は衰退し、自分の知識、地位、収入を権利として、親族集団のためではなく自分のために使いたいとする教育エリートの「知識の独占」の考え方が広がっていったと考えることもできる（注⁹⁾）。

写真1 初産女性の披露目の儀式（オマガット）。



写真2 ドル紙幣を手に新婦に歩み寄る親族女性。



（3）性別役割分業

パラオの性別役割分業については、これまでも民俗学者や文化人類学者によって伝えられている。例えば、女性の仕事として農耕（タロ芋畑・タピオカ芋畑、ターメリック畑の世話）（注¹⁰⁾）、浅瀬や浜辺でのナマコやカニの採集、日常の料理、カゴ、ゴザ、土器の制作などが挙げられており、また男性の仕事としてココヤシ、ビートルナッツの採集、船を使つての漁労、儀礼のときの料理、縄、釣り糸、カヌー、鱉甲の装飾品や皿の制作などが報告されている（Force 1976）¹⁴⁾。

現地で観察や聞き取りをすると、伝統的な性別役割分業の影響は今日にも残っていることがわかる（注¹¹⁾）。もちろん、若い世代には農耕を嫌がる者もいれば、日常の料理を男性が担当している姿も珍しくない（注¹²⁾）。また、伝統的には船で沖に出て釣りをすることは男性の役割とされていて、かつては女性がこれをするのは好ましくないとされていた。しかし、今日ではレジャーでパラオの女性が釣りに出ることも珍しくはなくなった。パラオはかつて諸外国によって統治されたが、その方法として「旧慣温存」の方針がとられたため、外国による統治下においても伝統的な慣習が残ってきたと考えられる。しかし、固定した伝統に留まるだけではなく、外国から流入する知識やモノを現実的な態度で様々な価値を組み合わせてきた。つまり、「慣習的思考」自体が近代的な思考との相互作用のなかで「伝統」というラベルをまとって形成されてきたといえる（遠藤 1999）¹⁵⁾。

現在では、パラオの女性は、官僚はもちろん、アメリカの軍人になる者、エンジニアや研究者になる者も増えてきた。このような点では性別役割分業の意識は薄れてきていると言えるだろう。しかし、国家公務員として中央省庁で働く女性職員（I・Reynolds）によれば、パラオ人女性にとって働くことは経済活動の他に、親族ネットワークを維持する意味もあるという。親族ネットワークの維持は、パラオの女性が伝統的に担っていた機能でもあった。この女性職員が勤務する課室は、南部の離島であるペリリュウ州、

アンガウル州の出身者が占めており、他州に比較しても女性の連携が強いという。そして、一見すると近代的な役割を持っている官僚組織も、自分たちの出身州の利益になる事業の推進や他州の出身者が占有している部署との勢力争いや、伝統的儀式の実施など、伝統的な社会デザインの延長上の仕組として女性たちに活用されていると考えられる。

2. 伝統的な慣習と新しい価値観との間で

(1) 母系の親族集団

パラオの日常生活では、カブリール (kebliil) と呼ばれる村落組織が重要な機能を果たしている。この村落は、「地理的な集落そのものではなく、全体としてまとまりを持った社会関係の範囲＝社会圏 (余田 1968)」¹⁶⁾である。カブリールはそれぞれにチーフを擁する 10 の親族集団から構成されている。パラオでは親族集団の成員は母方のオエル(ochell)か、父方のウレエル(ulechell)のどちらか、あるいは両方のグループに属する(注¹³⁾)。一般的に、ウレエルは何らかの事情のためにオエルに参加できない者が所属するグループであり、財産相続、地位継承にあたっては、母方のグループであるオエルに属する者が正統として優遇される(注¹⁴⁾)。親族集団におけるチーフの称号 (以後、タイトル) は、一般的に父系社会で見られるのと同様に男性が継承するが(注¹⁵⁾)、チーフの指名権は親族集団の年長女性オウロット (ourrot) が持つ。オウロットが指名した男子は、チーフ会議で合意形成を経て正式に承認される。オウロットは、候補者がリーダーとしての資質を持つか否かについて判断するために幼少期の頃から長期にわたって観察する。タイトル保持者の選考は、「出生と所属だけでなく、その男性がクランやムラのために財政面や労働というかたちでどれだけ貢献したか、ということが評価の重要な要素」とされる (遠藤 1999) ¹⁷⁾。

親族集団の勢力を強くすることが、パラオにおいて政治的・経済的に優位な立場に立つために重要なことである。パラオは母方の親族集団を中心に人々をまとめることで、安定した集団をつくる社会デザインを形づくり維持してきたと言える。この社会デザインの堅牢さは母方の親族集団の紐帯の強さに関係しており、父方親族との関係は「父の死と共に切れてしまう」が、母方集団との関係は未だ「援助を求められれば断ることが出来ない」(Force, 1976) ¹⁸⁾という言葉からも窺うことが出来る。

(2) パラオ女性の「強さ」と大きな負担

伝統的なパラオの社会デザインは、「母」がきわめて重要な意味を持ち、年齢原理によって年長者には敬意が払われる社会である (遠藤 1999) ¹⁹⁾。パラオでは伝統的に女性の強さが語られてきた。女性の大学進学率が高く、奨学金の獲得も女性が男性を圧倒している (表 2)。また、伝統行事における女性の存在感や仕事で活躍する女性が多い状況もこの言葉を裏付けている。

パラオでは、女性が財産を相続すること、伝統行事においても女性を通じて高額な金銭が移動することから、女性は「財貨の来る道 (ロレラ・ウドウド)」と呼ばれる。しかし、女性が強いと言われる一方で、冠婚葬祭等のシューカン (Siukang) (注¹⁶⁾) のマネジメントや親族集団からの経済的貢献の期待が、女性にとって過度な重圧となっているとの声も多く聞かれる。さらに、若い女性からの聞き取りでは、伝統的慣習が足枷となり、学業、職業選択、移動の自由が妨げられると感じていると答えも複数あった。

歴史的に見れば、親族集団に供出するものは、鼈甲で作られた伝統貨幣やタロイモ、海産物などの身近な労働で賄うことが出来る品々が一般的だった。しかし、今日の「シューカン」で求められる供物は、外貨の現金やそれで購入した輸入品である(注¹⁷⁾)。ハウス・パーティと呼ばれる住居の新築を祝う行事では、血縁関係の近さや社会的地位によって数千米ドルから数万米ドルを支払うこともある(注¹⁸⁾)。公立小学校教員の所得水準が月収 400 米ドルから 600 米ドル程度であることを考えると非常に大きな負担である(注¹⁹⁾)。ハウス・パーティは女性だけが金銭を負担する行事ではないが、親族集団におけるその女性の立ち位置によっては高額の支出を期待される。このような事情があり、パラオでは女性が教育を受けて、現金収入を稼ぐことが出来る仕事に就くことが非常に重要なのである。

パラオは太平洋戦争後の 1945 年から実質的なアメリカ統治下にあったが、1994 年の独立後もパラオの教育はアメリカから強い影響を受けている (Luka 2011) ²⁰⁾。既述のとおり、パラオの女性には現金収入を必要とする特別な事情があるが、アメリカの社会デザインに母系社会への配慮が反映されていないように、アメリカ式の学校教育の制度そのものには男女平等は謳われることがあっても、女性が親族集団への貢献のために男性よりも多くの現金収入にアクセスさせるための優遇措置があるわけではない。パラオの女性はアメリカ的な教育制度で学びながら、これを補完する形で親族集団のネットワークを駆使して、女性が教育機会や就職機会において優位な情報を得る努力をしているのである (廣瀬 2010) ²¹⁾。

(3) 女性の生活の変化

遠藤は、食糧供給などの伝統的慣習に価値を見出せなくなった女性は慣習を「無駄」と考えるようになり、家族は「近代家族化」し、女性が「主婦化」する現象が進展する可能性がある、と述べる (遠藤 2002) ²²⁾。しかし、図 1 のように、人口の 16% のフ

フィリピン人労働者が働いているパラオでは、女性は「主婦化」よりも、住み込みで月額 100 ドルから 150 ドルの利用料を支払って、フィリピン人家政婦やベビーシッターを雇い、パラオ人女性の伝統的役割とされてきたタロイモ畑の世話をバングラディッシュ人の男性にさせて、自分はオフィスで働くことを選んだ(注²⁰)。

私立女子高校を卒業後に 4 人の子どもを育てながら事務員をしていた R・Robert 氏（写真 3、4）は、5 番目の子どもを妊娠したのを機に家事や育児の他、親族集団で経営するコンビニエンスストアで販売する弁当や惣菜を調理するためのフィリピン人家政婦を 2 人雇い、自らは仕事を辞めてパラオ・コミュニティ・カレッジ（PCC）で経営管理学を学び始めた。経済の中心地のコロールの一等地にある大きな家を母から相続していたため、空き部屋には地方の親族がコロールの学校に通うために寄宿舎としても利用させていた。以前は、寄宿している若者に家事や子守を任せていたが、フィリピン人の雇用が一般的になると、親族の若者も進んで手伝いをしなくなったと言う。この現象は他の家庭でも見られるようになっており、かつては親族集団の若い女性に当然の役割として子守を頼むことができたが、都会では他にアルバイトの口があるなかで、フィリピン人ベビーシッターと同額の賃金を要求する若いパラオ人女性も増えてきた（安井 2012）²³。パラオ人で職業としてベビーシッターをしている者もいるが、フィリピン人に比べ料金が高いうえ、親族のシューカンに配慮しなくてはならないために使いにくいと言う（安井 2012）²⁴。

パラオでは年齢に縛られずに、チャンスをつかむためには学べるときに学ぶと考える女性が珍しくない（廣瀬 2010）²⁵。近年、コロール州では各集落に置かれていた保育所が統廃合されたため、州内に 4 校ある私立幼稚園に送り迎えする父母が目立つようになったという(注²¹)。パラオで唯一の高等教育機関であるパラオ・コミュニティ・カレッジ（PCC）には、2000 年に、2 歳半から就学前までを対象とした保育所が設置された。当初は PCC で働く外国人の教職員の利用を見込んで作られた施設であったが、保健省、パラオ・コミュニティ・アクション・エージェンシー（PCAA）からの補助金を得て運営されるようになり、一般利用者にも使いやすい値段（月額 40 米ドル程）で開放されるようになった。

写真 3 仕事後に育児を楽しむ女性。



写真 4 社会人カレッジの修了式。



写真 5 子どもにパラオ語を教える女性。

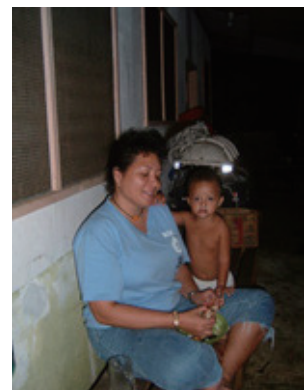


表 1. パラオの外国人数（総計、女性）

国籍	総計（2005 年）	女性（2005 年）
パラオ国の人口	19,907 人	9,208 人
パラオ	14,448 人	7,707 人
フィリピン	3,253 人	1,378 人
中国	317 人	136 人
台湾	70 人	13 人
韓国	83 人	33 人
ベトナム	321 人	2 人

出所：2005 年度国勢調査より筆者作成

写真 6 育児を楽しむパラオの男性（左から 2 番目）



しかし、外国人労働者が家庭に入ることによって、子どもの教育や健康への悪影響という問題が出ている。フィリピン人家政婦が働く家庭では、油分や塩分が多い肉料理やピザ、パスタが食卓に増えた。タロイモと魚というパラオの伝統的な食事の機会が減少し、伝統的知識の消失だけでなく、肥満児童の増加が社会問題になった(注²²)。また、パラオの文化の継承についても影響が出ている。パラオ語は 2 万人の人口が使用する希少な言語であるが、もともと口承伝承の言語であり、アルファベットの標記も後に充てられるようになった。フィリピン人のベビーシッターと過ごすことで、パラオ語を身に付けるために大切な幼少期にパラオ語と接する

機会が少なくなっているという話も良く聞くことができる。都市部では、パラオ語に苦手意識を持つ子供が増加している（廣瀬 2008）²⁶⁾。無文字社会にあっては、言語の喪失は直ちに文化の喪失につながり、伝統的慣習の意味を継承することにも悪影響を及ぼすと考えられる。R. Robert 氏は、フィリピン人家政婦に家事や子守を任せているがゆえに、子どもとのパラオ語での触れ合いの時間を大切にしている、と述べた（写真 3）。

3. パラオ女性の教育と職業に関する統計から

(1) 女性の教育と仕事

パラオ国勢調査（2005 年度）によれば、25 歳以上の女性 5,563 人のうち、大卒以上が 1,062 人で（注²³⁾）約 19%を占めている。現役学生については、総数（注²⁴⁾）5,017 人のうち約 50%の 2,517 人が女性であった。短期大学を含む大学生の総数 545 人のうち女性は 285 人で 52. 5%を占めている（注²⁵⁾）。この数字からは高等教育の機会について、男女間の格差は見られない。

次に女性の就業状況では、16 歳以上で有職の女性は 3,795 人であり、その業種別の内訳は、農業 205 人、水産業 22 人、鉱業 2 人、建設業 46 人、製造業 74 人、卸業 9 人、金融業 91 人、サービス業 1,641 人、電力・通信 171 人（注²⁶⁾）、公務員 525 人であった。ここからパラオ女性の多くが、サービス業、公務員として働いていることがわかる。セクター別では民間企業等 2,164 人、国家公務員 1,035 人、地方公務員 161 人、外国政府関連 183 人、自営業 247 人、専業主婦 5 人となっており、女性の就労者のうち約 31%が公務員（公社や独立行政法人を含む）として公共部門で就業している。伝統的な性別役割分担においては、農業は女性の仕事とされていたが、職業キャリアの傾向として、パラオの女性は第一次産業よりも公共部門の事務職やサービス業などの第三次産業に職業を求めるようになっている。

(2) 専門職と行政職

パラオの女性に人気の職種は専門職と行政職である。ここでいう専門職とは資格、学位、高度な技能を要する独立性の高い職業である。表 2 は、25 歳以上の男女別に専門職と行政職の比率を、高校中退、高校卒、学士号、修士号の学歴別に表したものである。

表 2. 25 歳以上の男女別専門職・行政職の割合。

学歴（女性）	総人数（人）	専門職 人（%）	行政職（人・%）
高校中退	392	43（約 11%）	24（約 6%）
高校卒	1517	221（約 15%）	167（約 11%）
学士号	350	158（約 45%）	63（約 18%）
修士号	81	48（約 59%）	18（約 22%）
学歴（男性）	総人数（人）	専門職（人・%）	行政職（人・%）
高校中退	803	80（約 10%）	185（約 23%）
高校卒	2679	160（約 6%）	426（約 16%）
学士号	402	88（約 22%）	87（約 22%）
修士号	126	56（約 44%）	33（約 26%）

出所：パラオ国勢調査 2005 年(OPSR 2005)より筆者作成

表 2 からは、高卒の女性 1,517 人のうち、専門職が 221 人（約 15%）、行政職が 167 人（約 11%）であることがわかる（注²⁷⁾）。大卒の女性については 350 人のうち専門職 158 人（約 45%）、行政職 63 人（約 18%）に就いており（注²⁸⁾）、修士号を取得した女性は 81 人のうち 48 人（約 59%）が専門職に、18 人（約 22%）が行政職に就いていることがわかる。

次に男性を見ると、高卒の男性 2,679 人のうち、専門職は 160 人（約 6%）、行政職は 426 人（約 16%）（注²⁹⁾）。大卒の男性については、402 人のうち専門職が 88 人（約 22%）、行政職が 87 人（約 22%）である。そして、修士号を取得した男性は 126 人のうち、専門職 56 人（約 44%）、行政職 33 人（約 26%）であった。このことから、行政職では男性の比率が女性よりも高くなる傾向があるが、学士以上の学歴で専門職に就職する女性の比率は男性よりも高くなる傾向があることがわかる。

また、高校中退の男性は 803 人のうち、専門職が 80 人（約 10%）、行政職が 185 人（約 23%）である。一方で高校中退の女性の場合は、392 人のうち専門職は 43 人（約 11%）いるものの、行政職では 24 人（約 6%）に止まっている。しかし、男性の場合は高校中退であっても行政職に就職する比率が女性よりも高くなっている。この理由として、パラオの親族組織で主なタイトル（注³⁰⁾）を継承するのは男性であることから、タイトル所有者として相応しい収入と社会的地位が持てる行政職については、男性優位の情

実採用があると考えられる。一方で専門職の場合は、学歴や専門的な技術や経験が求められることから、行政職に比べて情実採用が行われにくいと考えられる。

（３）学歴と収入の状況

表３は「男女別学歴と年齢分布」を表している。最も高収入のカテゴリである「50k—more」を見ると、女性の場合、高校中退 0.5%、高卒 0.7%、学士 6.5%、修士 25.9%となっている。同じカテゴリについて男性の場合を見ると、高校中退 1.3%、高卒 0.8%、学士 19.9%、修士 47.6%である。パラオでは公共部門が一番大きな産業であり、官公庁の管理職の賃金が最も高いとされていることから、女性に比べ男性のほうが公務員として採用され出世するには有利であることを裏付けている。次に、収入のカテゴリ「20k—29.9k」を見ると、女性の場合、高校中退 16.5%、高卒 22%、学士 53.7%、修士 37%であった。同様に男性の場合では、高校中退 0.9%、高卒 14.5%、学士 39.5%、修士 26.1%である。また、同じ学歴でも収入が低くなると、男性に比べて女性の方が人数の比率が高くなり、その傾向は学士・修士のように学歴が高いカテゴリになるほどに顕著である。

パラオの女性にとって、高学歴は高収入を得るために有効な手段であると考えられており、実際のところ高収入が得られる公共部門の管理職に女性が就いている事例も決して珍しくはない。しかし、公務員の仕事が男性チーフたちにとってその地位や名誉を満たす職業と見做す考え方も残るなかで、女性の社会進出が決して容易ではないという事情もある。

表 3. 男女別学歴と年収分布

収入 学歴（人）	7.5k—9.9k （人）	10k—14.9k （人）	15k—19.9k （人）	20—29.9k （人）	30—49.9k （人）	50k—more （人）
女性						
高校中退 (392)	43	119	70	65	13	2
高卒 (1517)	141	318	217	335	32	11
学士 (350)	14	46	39	188	60	23
修士 (81)	4	6	3	30	31	21
男性						
高校中退 (803)	98	256	118	80	9	11
高卒 (2679)	498	622	373	391	36	24
学士 (402)	23	43	41	159	60	80
修士 (126)	1	6	4	33	23	60

出所：Office of Planning and Statistics Republic of Palau (OPSR), 2005, 2005 Census of Population and Housing of the Republic of Palau Volume 1: Basic Table

※1) k は 1,000 米ドルとする。 ※2) 合計人数には無収入者の人数も含む。

（４）パラオの女性と奨学金

第二次世界大戦後間もなく、パラオに対する国連の信託統治が始まり、パラオは米国から多額の教育援助を受けるようになった。1960年代のケネディー政権になると、その援助額も大幅に増加し、1970年代・80年代は奨学金で大学に進学するミクロネシアの学生数が急増した。特に、パラオ人は教育による上昇志向が高いことで知られており、1955年の統計によれば、ミクロネシア地域の留学生 165 人のうちパラオ人が 109 人（約 66%）を占めた²⁷⁾。

教育による上昇志向の高さは 1994 年の独立以降も変わっていない。4 年制大学がないパラオでは、大学進学者は米国・豪州など外国に留学する必要がある。若者は何らかの経済援助が必要である。パラオでは年齢、性別、社会通念に囚われず、チャンスを活かすことが奨励されるため、若者はあらゆる機会を利用して海外留学や海外研修を望む。パラオの若者にとって奨学金は、米軍に入隊する以外で教育機会を得る希少な機会である。

表 4. を見ると、パラオにおける奨学金の申請者・受給者ともに女性が圧倒的に多いことがわかる。パラオ国立奨学金委員会 (PNSB : Palau National Scholarship Board) の資料によれば、1996 年では、奨学金で高等教育を受けたパラオ人女性は 285 人で男性の 147 人を大きく上回る (Bureau of Women's interests, 1997)²⁸⁾。PNSB によれば、2008 年度は合計で 240 人の学生が各種奨学金を申請し、同年 9 月現在で 171 人が何らかの奨学金を受け取っている²⁹⁾。

親族集団のタイトル継承権を持つ男性は、親族組織から経済的支援を受けて外国で高等教育を受ける機会を与えられることもあ

るが、一般的な若者は男性であっても自力で公募の奨学金を得る必要がある。パラオでは、既に述べたとおり、親族集団の女性に経済的な貢献が求められていることから、女性はより高い賃金を期待できる職業に就くために、大学進学を切実に願っていることから、その結果として奨学金を獲得しようという意欲においても男性を凌いでいる。

表 4. パラオ国立奨学金委員会を經由した奨学金受給者数の男女別構成

年度	申請者 合計・人	女性 申請者・人	男性 申請者・人	受給者 合計・人	女性 受給者・人	男性 受給者・人
2004—2005	234	147	87	175	125	50
2005—2006	275	188	87	178	139	39
2006—2007	294	193	98	177	121	56
2007—2008	279	182	97	182	130	52
2008—2009	247	155	92	174	105	69

出所：パラオ国立奨学金委員会 2008 年資料から筆者作成

4. 女性の意識と男性の意識

(1) 親族組織と女性の地位の変化

パラオにおける強さとは、有力な親族組織に所属することであり、知識を持つことであり、かつ親族組織への貢献度が高く、強い発言力を持つ立場にあること、である（遠藤、2002）³⁰⁾。ユシームは、「学校制度が階層を崩す作用をもたらした」（Useem, 1950）³¹⁾と説明する。このように外国から導入された教育制度により、特定の親族組織に独占されてきた「知る権利」を広く開く作用をもたらし、新興エリートを出現させたことは確かである（Kesolei 1977）³²⁾。かつての学歴エリートは親族集団からの期待を背負って送り出されたエリートであった。その場合その人物は伝統部門においても同様にエリートである場合が多かった。しかし、学歴と経済力で新しく学歴エリートにとって、伝統的な価値観は必ずしも最優先すべきものではなくなっている。

パラオにおいては、伝統的に女性の労働は高く評価されており、家事労働に対しても対価が支払われてきた。そのような伝統の影響もあって、パラオでは女性が働くことはごく自然なこととして受けとめられてきたと言える。しかし、その一方では、伝統的価値観からは女性が自分の能力をアピールすることで公共の場に出ることは好ましくないこととされてきた。そのため、アメリカの統治下における民主主義に基づく選挙が導入された時にも、男性が選挙運動でその能力を国民に訴える姿は一般的に見られたが、女性が政治的リーダーとして参画することはまだ一般的なことでなかった。この点について、ウィルソンはパラオの社会における母親存在の重要性から、女性が政治家などになり公の場で批判に曝されることを好ましくないとする風潮があることを指摘している（Willson, 1995）³³⁾。先述のとおり、パラオでは男性の伝統チーフを指名するのは親族集団の高齢女性である。男性チーフが組織を導いていくのに相応しくないと判断された場合、高齢女性たちは同じ親族集団のほかの男性がチーフの「首を挿げ替える」ことを承認した。命が惜しい男性のなかには、指名されてもチーフになりたがらない者もいた。他方で、チーフの席が空位でその人物として相応しい男性がいない場合、もしくは、チーフの地位をめぐる村落内で揉め事がある場合などには、高齢女性が暫定的にチーフに就くことがあった。しかし、男性チーフの場合とは異なり、女性チーフは「首を挿げ替える」対象とはならなかった。

近年、若く学業成績も良いパラオ人女性がアメリカ軍に入隊し、命の危険が高いイラクやアフガニスタンに派遣されたというニュースを新聞紙面で見かける。なかには銃弾の犠牲になった者もいる。また、政治の世界に進出して、テレビやラジオの公開番組で熱い討論を行う女性も見かけるようになった。これまでの女性チーフの役割に象徴されるような、女性が男性をある意味でコントロールして社会を治める、かつてのスタイルが過去のものになり、女性自身が前面に出て社会を制御しようとする傾向が強くなったと思われる事例も増えている。ここからも、パラオのこれまでの社会デザインが、現在のニーズとかみ合わなくなっている様子がうかがえる。

(2) 事例研究—聞き取りから—

B・マリノフスキーのトロブリアント諸島の調査に基づく生殖観によれば、子の身体を形づくるのは母親の「血」であり、妊娠にまつわる父親の生理学的役割は認知されていなかった。しかし、父親の社会的役割は大いに認められていた。乳幼児を抱いたり、清潔な状態にしたり、排泄物の世話をするなど熱心に子どもの世話をする行為は父親が果たす特別な役割であり義務であり、父親は喜んでこれを行った。トロブリアントでは、父親が子どもを自分の手で手塩にかけて育てることで、子どもの姿形が父親に似てくると考えられていた。父親は子どもの世話をすることで子どもの父親になったのである³⁴⁾。

ここでは男性の視点から、パラオの女性の社会参画について考えてみたい。

① 名前：K・N／年齢：39歳／性別：男性／職業：高校教師

調査時期：2003年：コロール州マカティ地区

「自分はグアムの大学で建築学を学び、現地で就職した。そして、パラオ人でない女性と結婚し、男の子が生まれた。その女性とは結局離婚し、自分はパラオで政府の仕事をしている姉を頼って息子を連れてパラオに帰った。そしていくつか仕事を変えて、今は高校で数学教師をしている。支援する義務のある女子は姪が1人だけだ。彼女は、姉の役割を継ぐ権利がある。母系社会のパラオでは母親が外国人の私の息子は弱い立場になるので、彼の将来に心配がないと言えは嘘になるが、息子は性格については少し大人しすぎると思うこともあるが、まじめなので大丈夫だと思う。……中略……パラオでは自分の息子よりも、姉妹の子どもに心配りをする必要がある。クリスマスなどの行事はもちろん、普段からプレゼントを買ってあげたり、進学するときは学費の工面もしたりする役割がある。……中略……、姪はアメリカの大学に入学させるようなので、息子に学費を十分に準備してあげることが出来ないかもしれない。奨学金を取って進学するか、パラオで暮らしていくなら、人間関係の分野よりも腕前で食べていけるメカニックの勉強をした方がいい。」（聞き取り時の女子は2013年現在でハワイの大学で学んでいる）

② 名前：C・B 年齢：37歳／性別：男性／職業：小学校教師／婚姻：未婚（内縁の妻あり）

調査時期：2013年9月 コロール州トップサイド地区

「結婚はしていないが、一緒に暮らしている女性がいる。彼女は政府関係の仕事をしている。親族集団の関係も複雑で、色々面倒なことがあるので結婚はしていない。これからも一緒に暮らすつもりだけでも結婚はしないと思う。彼女は忙しいので、毎日の食事の支度なんかは自分がやる。パラオでは男性が料理をするのは珍しくない。主食の芋などの調理は女性がするけれど、タンパク質系の魚や肉は男性が調理することが多いと思う。パラオでは女性が勤め人をしていて、男性が漁労や自営業をやっているという夫婦は多いと思う。自分は小学校で社会科と体育を教えている。パラオの悪い点なのか、良い点なのかはわからないけれど、仕事より家庭や親族集団のことを優先してしまうこともあるし、いろんなところで公私混同も多い。

彼女は年上で、子どもは欲しいけど、出来ないかもしれないと彼女とはよく話している。しかし、その時は親族の子どもをアダプト（養子縁組）しようと思う。今も親族の土地の一角に小さな家を建てて暮らしていて、親族の子どもたちは毎日のように遊びに来ている。近い親族から養子縁組することはパラオでは普通に見られることなので、全く知らない子どもを迎えるわけではないし、子どものほうも、もちろん心理的には複雑なこともあるとは思いますが、そこまでストレスは大きくないのではないかと思います。パラオでは小さなころから母系のオジやオバから、色々な技術を教えてもらう。自分も釣りや蝙蝠の取り方、その道具の作り方や使い方をオジから学んだ。パラオでは、父親だけでなく、同じようにオジを頼ることが出来る。オジも母系の親族を良く世話することで、親族からの信頼も厚くなる。自分の甥や子や近所の子もたちにいろいろ教えたりしているけど、自分もそうやって育ててきているから当たり前のことをしている感じだ。親族がある程度まとまって生活し、甥や姪の面倒を見ているから自然にそうなる。年頃の若者は時に言うことを聞かない者もいるけれど、パラオでしか生きる道がない者は、チーフや高齢の者に注意されれば大抵は大人しくなる。」

③ 名前：O・A／年齢：46歳／性別：男性／職業：漁師、自営業

調査時期：2008年10月 ガラロン州オレイ地区

「……中略……、漁業組合に所属している漁師だけど、組合が活発ではないので、シャコ貝(giant clam)の養殖の作業の他は、自家消費用に漁に行ったり、加工して時々町のマーケットに出したりしている。弁当を作ってひとり暮らしの高齢者に届けることもしている。……中略……妻は、小学校で教員をしている。妻が仕事をしていることは彼女にとっても、家計にとっても良いことだと思う。この地域では、定期的な現金収入をもらえる仕事は教員か、役場の職員しかない。役場の職員も臨時雇いのパートタイムが多く、昔は「キンロウハウシ」として行っていたこと、例えば、草刈・掃除・建物の修繕等を、少し謝金をもらってやっているという感じかな。

料理については、魚の燻製、フライ、スープ、煮貝などの魚介類の料理は、なんとなく男性の役割だね。その他の料理については、パラオでは日常に家族一緒に食事をするということがあまりないので、食べたい時に自分で料理して食べる。どうせつくるから、みんなの分も自分で作っている。仕事で作る弁当は、ひとり暮らしの高齢者のところに配達することが多い。正直、儲けというほどのものはないけど、毎月コロールに住んでいる彼らの親族から料金を貰っている。……パラオでは昔から、若い者は漁に行った際に、一番貴重な魚やエビを高齢の女性や自分で漁に行けなくなった高齢の男性に最初に配ってから、そのあとに若者で

分け合っていた。高齢女性は高級魚の頬肉や頭の肉を好む。だから、頬肉や頭の肉が美味しそうな魚を渡していたんだ。そういう習慣が昔からあったから、今は少しお金をもらっているけど、お金以上に価値のある良いものを届けているよ。この辺では仕事が無いから、若い世帯はコロールで働いていて、週末に帰ってくる生活をしている。だから村は老人と子供の比率が高い。親も子供が高校生になるまでは、村で生活させた方が子どものためにも良いと思っているので、自分の親やオジ等の親族に子供の面倒を見てもらっている。週末に村に帰ってくるとき、生活雑貨や食料を運んでくれる。持ちつ持たれつ。自分は漁師でもあるし、店主でもあるし、青年団のリーダーでもあるし、村議会議員でもある。村には人が少ないから、ひとりで何役もこなす。子どもたちにとっても、家庭のことも、村の仕事も何でもできる父親が村ではかっこいいんだよ。」

④ 名前：O・M 年齢：23歳／性別：男性／職業：大学生

調査時期：2006年9月 コロール州マダライ地区 日本語で回答

「私はアメリカで育ったパラオ人で、小学校もハイスクールもアメリカで通った。大学はカリフォルニアの大学で日本語と日本文化を専攻した。子どもの頃から日本のコメディやアニメが好きで、特に日本のお笑いではダウンタウンが好きで、友達が送ってくれたビデオを何回も観て、日本語を覚えてしまった。だから、本当は関西弁が得意。大学に入る時には日本語は普通に使えたので、学生時代はけっこう割のいい翻訳のアルバイトなんかをした。私は、アメリカに残ってメディア関係の仕事をしたいのだけれど、大切なシェウカンがあるからと父親に言われて、一時的にパラオにきた。実は、早くアメリカに戻りたいんだけど、父が許してくれない。(何故、アメリカに戻りたいのかとの質問に対して)。さっきも、子どもたちが来て話しかけていったでしょ。でも、実はほとんどわからなかった。私はパラオ語については挨拶くらいしかわからない。だから、パラオの文化も頭ではわかるところがあるけれど、実際はよくわからない。パラオの子どもたちにも、私はパラオの伝統を教えることはできない。パラオでは自分はお客さんのような気がしてしまう。父はまだ何も言わないけれど、わたしをパラオで働かせたいと思っているみたい。わたしは、パラオの社会では伝統的な役割も期待されていなかったし、そういうつもりでアメリカ暮らしをしていたので、アメリカで働いてアメリカで結婚して、アメリカで暮らしたい。結婚も、パラオ人の女性でもいいけれど、パラオ人じゃなくてもいい。パートナーとして対等な関係を作ればいいと思う。パラオ人という国籍は捨てるつもりはないけれど、パラオでずっと暮らすことも、いまは考えられない。」

聞き取り①は、自分の息子に優先して姉の娘に対して教育費を始め様々な支援を行っているパラオの男性の事情が述べられた。聞き取り②では、伝統的慣習では結婚について親族集団間の力関係に起因する複雑な問題があるため、事実婚をしている様子が述べられた。また、親族集団の子どもを養子縁組することも特別な事ではないこと、パラオの男性は、自分の子どもだけでなく親族集団の子どもたちの子育てに関与する機会が多い様子がうかがえた。聞き取り③では、地方では人材が不足しがちで、一人で複数の役割を担う必要がある事情がわかった。男性は自家消費の漁労、商店の経営の他、村落のキンロウボウシなど多様な仕事を期待されている。女性は小学校教師や役場で働くことで安定した収入を得ている。村落の男性は何でもできる器用さが重宝され、子どもたちからも尊敬されるという。聞き取り④では、アメリカで育ち、英語と日本語は不自由なく使えるが、パラオ語はほとんどわからず、パラオ人でありながら、パラオ社会への適応に不安を抱いている若者の様子がうかがえた。結婚相手との関係もパートナーとしての対等な関係を希望していて、親族の子どもたちにパラオの伝統も伝えられないことをはじめ、母系制の社会の仕組に戸惑いを感じている様子がうかがえた。

パラオでは、漁労や魚や肉の調理は伝統的に男性が担ってきた役割であり、村落では気が利いて色々な事を器用に出来る男性が尊敬される。料理を作ること、地域づきあいが出来ること、家事や子どもの世話ができることは、男性が評価される重要な要素のひとつである。地域や家庭での男性の役割が期待されており、職場での働きぶりや収入だけが男性の能力をはかる基準になっていない点が興味深い。

まとめ

本稿では、母系社会の影響が色濃く残るパラオの生活を事例に、女性のライフ・イベントと仕事の変容とその課題について考えた。パラオにおいて、アメリカの価値観を反映させた生活様式が広く普及し、受け継がれてきた伝統的価値も時代の変化と共に変容しているというのは事実である。しかし、パラオの社会デザインの基調は今日においても母系社会の価値観と親族集団との良好な関係性にあることも事実である。女性の教育熱や社会進出についても、アメリカが紹介した民主主義や教育制度なども、伝統的な母系社会の仕組の延長線上に置かれたものと考えられる。このことは、例えば、次のことからわかる。人口が2万人のパラオには伝統的に16の地縁・血縁からなる村落があるが、近代的な制度においても伝統的な枠組を用いた16の州が設置されている。

そこでは、州議会議員選挙が行われ、一定枠には一般から選出された議員が就くことになっているが、親族集団のチーフの指定席となっている議席も多い。また、1. (3) で述べたように、中央官庁の部局が同族の職員で構成されており、職場の組織やネットワークが伝統的儀礼の運営に利用されている様子も日常的に観察できる。しかし、パラオの女性が学校教育を受け、社会進出した結果、これまで親族集団の繁栄に貢献する目的とされていたところから、純粋に知的好奇心や仕事のやりがいのために働きたいと考える女性が増えてきた（廣瀬 2010）³⁵⁾。これに伴って、伝統的な価値観やそれに基づく仕組が変化を迫られる場面が増えてきていることも確かである。

一方の男性については、どうであろうか。パラオでは育児や子どもの世話をする男性をよく見かける。パラオの社会では、子どもの世話をしない男性は、たとえ仕事が出来たとしても、村落を治める器量が無いと見做されるため、社会的評価は低くなる。伝統的に、チーフにふさわしい男性は高齢女性に指名されるが、高齢女性はチーフ候補が若年である頃から、兄弟姉妹や親族たちとの関係を観察し、その人物が親族集団のことを考える思慮深いリーダーとしての資質を持ち備えているか否かを見極めた。パラオの男性が、今日においても子育てに積極的に関与することには、パラオの伝統的な仕組の中に、母系社会における男性の役割が組み込まれていたことが影響しているのだろう。

パラオの人々は、パラオの伝統的な仕組を社会のデザインという観点からは捉えているわけではない。しかし、少なくともパラオ人が大切にすべき価値観を住民が共有する仕組が伝統的な方法で受け継がれてきた。その仕組は、歴史的に大国の統治およびその制度や価値観の影響を受けながらも、伝統的価値を土台に残し、その延長線上に外国の影響を取り入れてきた。しかし、学校教育によって生まれた教育エリートとなった若者たちのなかには、5. (2) ④のアメリカ育ちのパラオ人男性のように、パラオ人が伝統的に大切にすべきと考える優先順位に心からは納得できないと考える若者がいることも事実である。彼らが伝統的価値を理解できないようになった理由として、パラオ社会の仕組を支えてきた社会デザインを共有するための儀式や伝統的教育への参加の機会が少なくなったことが挙げられよう。そもそも無文字社会であったパラオでは、ウドウドという伝統貨幣とともに女性が記憶してきた知識は、文字化された知識を伝える学校教育には不向きであったであろうし、1. (2) でパラオでは「知識は制限される」と紹介したように、伝統を伝える側の者たちもこれらの知識を文字化する努力をしてこなかったことも影響しているだろう。

パラオでは、国家という大きな枠組よりも、親族集団への帰属にアイデンティティーを感じ、そして親族集団とつながっていることが精神的な安心感をもたらすと答える者に多く出会う。親族集団には何らかの貢献が求められるし、その負担も大きい。しかし、貢献の形は多様であり、成員の誰にでも何らかの形で貢献できる方法があった。これは、パラオ流の人間を活かす仕組、社会のデザインであったのかもしれない。しかし今、新たに解決が求められる課題は、アメリカ式の教育を受け、価値観が多様化している若者が増える中で、これまでの社会デザインを、社会のすべての成員が共有することが難しくなっていることに起因している。

社会のグローバル化につれて、価値の一元化がますます拡大するとの見方もあるが、その土地に生活している以上、自然環境や社会環境に適した生活というものがあるべきである。社会開発の領域では、内発的発展論 (endogenous development) (注 31) の議論が生まれるなど、多系的発展形態を見直そうとする動きもある。情報、ヒト、モノの移動が加速するなかで、世界とつながりながらも地域の特徴を活かそうと考える、社会のグローカル化や地域社会の話し言葉 (vernacular) のライフスタイルに注目した持続可能な社会づくりを望む声も聞かれる。

社会をデザインするという考え方自体は、公共施設やサービス等の領域で徐々に広がりを見せている⁴²⁾。しかし、社会デザインは自然環境、社会環境、歴史、次世代育成など幅広い領域を包括した、自分たちの生活についての希望を社会づくりに反映させるというような広い意味で使用されても良いだろう。パラオでは、伝統的に継承されてきた社会の仕組を土台にその延長線上に外国の知識や制度を「接ぎ木」してきた。これからも、多様な社会から発信された制度を「接ぎ木」しながら、パラオという社会にまとめていくためには、多様な「接ぎ木」の役割が有機的に関連付けられ、全体として効率的に機能させるためのグランドデザインが必要となる。そのためには、母系の価値に基づく仕組が伝統的に果たしてきた役割について老若男女が協働して考え、若者が何となく従ってきた社会の仕組を、これから自分たちはどのような社会をつくって行くか、どのように働き、どのようにライフ・イベントを営んでいくかについて話し合い、すべての住民が参画する形で社会デザインをつくり、それを共有していく作業が是非とも必要とされると考えられる。

【注釈】

¹ 母系制度は母方の血筋によって家族や血縁社会を構成する社会制度。母系出自、母系相続の特徴を持つ。母系社会においても政治権力は母系の男性が持つことが多い。パラオは母系社会と言われるが、養取が頻繁に行われること、父方にも帰属できることなど、厳密な母系社会ではなく「準母系的複系 (清水 1989)」³⁶⁾とも呼ばれる。

² パラオ共和国：カロリン諸島の西端、北緯2度から8度、東経131度から135度に位置し、海域面積312万平方km、陸地面積488平方kmを有する島嶼国。人口は約2万人 (2005年度国勢調査では人口19,907人、内パラオ人は14,448人)。

³社会デザインと類似した言葉にコミュニティデザインやソーシャルデザインがある。コミュニティデザインは、地域のひとが地域の課題を自分たちで解決するために、「人のつながる仕組」を設計することである。ソーシャルデザインは、例えば、ユネスコのソーシャルデザインのための SNS サイト「DESIGN21」では、“Better design for the greater good” (より素晴らしいことを生むより良いデザイン)」と定義されている。どちらも、課題解決という目的や、何かをよりよくする目的のデザインという意味合いを有している。しかし、本稿で使用する社会デザインは、社会のグランドデザインに近いものである。これについて、例えば、立教大学³⁵⁾は「社会の規範を規定する象徴構造」を社会デザインと捉え、その構造を研究するとともに、社会のパラダイム変換を促し、新しい規範、行動様式を迫及するダイナミックな営み全体を指し示すとしている。

⁴パラオ人のみの数字では、5,412 人中、1,585 人が公務員・準公務員 (29%) である。

⁵第一子の出産儀式は地域によってその呼称が異なるが、コロールの「オマガット」とアンガウルの「ガス」が有名である。

⁶母系社会では、子どもとオジ、姉妹との関係は親との関係と同じくらいの重みをもっている (遠藤 1999)³⁷⁾。男性は自分と母系の地を共有する甥や姪にも気を配り、プレゼントを買ったり、学費の一部を負担したりする人もいる (安井 2012)³⁸⁾。

⁷大切な知識はゆっくりと口頭で伝え、「チャント」と呼ばれる歌などにして記憶をする場合もあった (安井 2012)³⁹⁾。

⁸Kesolei 女史は、北部の女性首長 (エビレクライ) を排出する有力な母系親族組織のメンバーである。

⁹北部の大チーフであるギルマン氏への聞き取り (2009 年)。

¹⁰タロ畑 (Taro patch) での作業は、伝統的に女性の作業とされてきており、現在にもその精神は受け継がれている。50 代のある男性に依れば、男性が女性との結婚を決める判断の 1 つとして、タロ畑の作業姿が大切とされていた (2009 年の聞き取り)。現在、家庭菜園をするパラオ人男性も見かけるようになったが、農業局の担当者に依れば、畑仕事は女性の役割という意識は未だに残っており、産業としての農業の発展にとって足かせになっているという (2007 年の聞き取り)。

¹¹最近では、2013 年 9 月 15 日にフィールドワークの聞き取りによる。

¹²おかずは男性が調理担当である場合が多いが、主食であるタロイモやタピオカの調理は女性の仕事という認識が一般的にある。

¹³同時に双方の血縁集団に属することも可能。その場合、所属する血縁集団ごとに継承権などの優先順位が決められる。

¹⁴パラオは知識を力とする社会であり、自分の系譜に係わる情報は、利害関係が生まれる重要な知識と考えられているため、自身がどちらの集団に属するかなどの個人情報に秘密にされる場合が多い。

¹⁵チーフに相応しい男性の候補者がいない場合は、高位の女性が一時的にチーフになることもある (Useem 1949)⁴⁰⁾。

¹⁶シューカンにはベラウ語で「習慣」を表す言葉で、日本統治時代に用いられて以降、ベラウ語として定着してきた。

¹⁷シューカンは伝統的に行われていたが、派手なパーティが催されたり、多額の財産が消費されるようになったりしたのは、アメリカ統治時代になってからのことであるという。(S・M 氏からの聞き取りによる 2009 年)

¹⁸2008 年 11 月 2 日に執り行われたアイライ州とアイメリーク州のタイトル (称号) を持つルバック (長老) の葬儀には 300 人以上の関係者が参列したが、日本円にして 650 万円の現金や鼈甲などが香典として寄せられたという。

¹⁹最低賃金法では、パラオ人労働者の場合、時給 2 ドル 50 セント、外国人労働者の場合、1 ドル 50 セント (2008 年 10 月現在)。

²⁰2013 年 9 月の現地聞き取りによれば、フィリピン人労働者の処遇が人身売買にあたるのではないかと批判があった中で、パラオにおいてフィリピン人家政婦の雇用の条件が厳しくなり、一般家庭での雇用が難しくなったと言う (Aileen・Takada 氏)。

²¹Aileen Takada 氏の聞き取りによる (2013 年 9 月)。

²²ミクロネシア地域内の共通問題でもある輸入食品依存による急速な食生活の変化に伴う心臓疾患、糖尿病等の成人病の有病率が、中年男女層で増加しており、国民の健康上大きな問題となっている (JICA パラオ事務所 事業展開計画)。幼児・障がい者教育改善に対しては、青年海外協力隊、シニア海外ボランティア (幼児教育、理学療法士) が派遣された実績がある。

²³内訳：準学士 (職業教育) 182 人、準学士 (教養教育) 337 人、学士 439 人、修士以上 104 人。

²⁴3 年間以上就学しているすべての学生

²⁵School Enrollment and Educational Attainment by Usual Residence, Palau: 2005.

²⁶準公務員：電電公社 (67 人)、電力公社 (20 人)

²⁷同国勢調査で、25 歳以上高卒有職女性のうち小売業・サービス業に就くものは 874 人であった。

²⁸School enrollment and Educational Attainment by Industry, Palau: 2005.

²⁹パラオの公立高校は授業料が無料で、高校就学率は 78% である (2000 年)。

³⁰ガブリールは原則として、10 の親族組織にわかれており、それぞれの組織には伝統首長の称号が定められており、これをタイトルと呼ぶ。親族の継承権を持つ者のなかから選抜される。女性にも高位タイトルはあるが、組織の男性がタイトルを持つにふさわしい人物かどうか、男性が幼少期のころから観察し、最終的な承認権を持つ。

³¹「人間集団が自分たちの持つもの (自然環境・文化遺産・構成員の創造性) に依拠し、他の集団との交流を通して、自分たちの集団をより豊かにすることであり、そうすることによって、それぞれの発展の様式と、生活様式とを自律的に作り出すこと」 (鶴見 1989)⁴¹⁾。

[参考文献]

- 1) Holmes, T.H. and Masuda, M.: Life change and illness susceptibility. In “Stressful life events” Editors : B.S. Dohrenwend and B.P.Dohrenwend, p1-5, John Wiley & Sons, New York (1974)
- 2) Dohrenwend, B.S. and Dohrenwend, B.P.: A brief historical introduction to research on stressful life events. In “Stressful life events” Editors: B.S. Dohrenwend and B.P.Dohrenwend, p1-5, John Wiley & Sons, New York (1974)
- 3) Luka, Virginia, 2011, Palau: Impact of Education and Cultural changes, Anthropology and Education, Southern Oregon University. <http://www.coplac.org/meternophosis.php?a=Spring2011> (2012年5月17日 確認)
- 4) MOF, 2006, “Schedule of U.S. Federal grants from 1995-2005”, Ministry of Finance of Palau.
- 5) 安井眞奈美, 2012年, 「変わりゆく母系社会・パラオの子育て」子育て支援合同委員会『子育て支援と心理臨床』福村出版
- 6) 廣瀬淳一, 2010年, 「パラオにおける女性の自己実現と教育機会—伝統的慣習と親族組織からの期待の中で」, 日本ジェンダー学会『日本ジェンダー研究』第13号
- 7) Palau National Committee on Population and Children(CoPopChi), 1997, “Sustainable Human Development ‘Progressing With the Past’”, United Nations
- 8) MOE, 2006, Education Master Plan 2006-2016 Republic of Palau, 2006, Ministry of Education of Republic of Palau.
- 9) 青柳真智子, 1985年, 「モデクグイー—ミクロネシア・パラオの新宗教」新泉社
- 10) Kesolei, 1977. Cultural Conservation: Restrictions to freedom of inquiry: Palauan strains. Paper presented at the Association of Social Anthropology in Oceania. Workshop on the Role of Anthropology in Contemporary Micronesia Trust Territory of the Pacific Island.
- 11) 遠藤央, 1999年, 「母系社会と男性性—ミクロネシア, パラオの「近代化」とジェンダー」, 西川祐子・荻野美穂編『共同研究男性論』人文書院 P297-325
- 12) 11と同じ。
- 13) Smith, D.R. 1983. Palauan Social Structure. New Brunswick: Rutgers University Press. p 309.
- 14) Force, M.T. 1976, The persistence of pre-colonial Exchange Patterns in Palau: A Study of Cultural Continuities. Ph.D. Dissertation. Walden University.
- 15) 11と同じ。
- 16) 余田博通, 1968年, 「村落共同体の構造」余田博通・松原治郎編『農村社会学』川島書店
- 17) 11と同じ。 P301
- 18) 14と同じ。 P110.
- 19) Wilson, L.B., 1995, Speaking to Power: Gender and Politics in the Western Pacific. New York: Rutledge.
- 20) 3と同じ。
- 21) 6と同じ。
- 22) 遠藤央, 2002年, 「政治空間としてのパラオ 島嶼の近代への社会人類学的アプローチ」世界思想社, p114,125.
- 23) 安井眞奈美, 2012年, 「パラオ共和国における出産のグローカリゼーション—出産儀礼に関する近年の動き」, 須藤健一編『グローカリゼーションとオセアニアの人類学』風響社
- 24) 23に同じ。
- 25) 11に同じ。
- 26) 廣瀬留美子, 2008年, 「子供たちの生活からみるパラオ社会—地方と都市の職業意識の比較から—」, 琉球大学人文社会科学研究所修士論文
- 27) Annual Report of the High Commissioner of the Trust Territory of the Pacific Islands, 1952.
- 28) Bureau of Women's Interests, Ministry of Community and Cultural Affairs. , 1997, “A Statistical Profile of Men and Women in Palau, Quality Print Ltd. Suva, Fiji. P50.
- 29) Palau Horizon, September 23, 2008. P 6.
- 30) 22に同じ。
- 31) Useem, J., 1950. “Structure of Power in Palau” *Social Force*, 29/1 : p141-148.
- 32) 10に同じ。
- 33) 19と同じ。 P161.
- 34) マリノウスキー, B, 泉靖一・蒲生正男・島澄訳, 1971年『未開人の性生活』新泉社
- 35) 6と同じ。
- 36) 清水昭俊, 1989年, 「ミクロネシアの首長制」『オセアニア基層社会の多様性と変容—ミクロネシアとその周辺』, 国立民族学博物館研究報告別冊6号, p122.
- 37) 2007年度立教大学自己点検・評価報告書 (21世紀デザイン研究科)
<http://www.rikkyo.ac.jp/aboutus/philosophy/activism/evaluation/self/pdf/303.pdf> (2013年9月5日アクセス)
- 38) 11と同じ。
- 39) 23と同じ。
- 40) 23と同じ。
- 41) Useem, J. 1949, Report on Palau. Coordinated Investigation of Micronesian Anthropology. Report No 21, Washington, D.C.: Pacific Science Board.
- 42) 鶴見和子・川田侃編, 1989年, 『内発的發展論』東京大学出版会
- 43) 筧裕介 2012年, 『地域を変えるデザイン』英治出版, 山崎亮 2012年『コミュニティデザイン 人がつながるしくみをつくる』学芸出版